

報告

CALL およびマルチメディア LL 教室を 使用した外国語授業の展開 - 外国語教育 FD 研究会の報告を兼ねて -

吉田文美
(徳島大学総合科学部国際文化コース)

(キーワード: 英語教育、外国語教育、CALL)

Teaching Languages in CALL System Laboratories - Meeting Report on FD Research into Teaching Foreign Languages at the University of Tokushima -

Yoshida Ayami
(Faculty of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima)

(Key words: Teaching Foreign Languages, CALL, Language Laboratory)

1) FD 研究会報告

2003年3月17日午後1時より本学工学部共通講義棟2階 CALL 教室にて、全学共通教育および総合科学部で外国語教育に関わっている教員を中心として、『CALL およびマルチメディア LL 教室を使用した外国語授業の展開 全学共通教育および総合科学部における外国語教育 FD 研究会』と題する FD 研究会を以下のように行った。

(第1部) 13:00-14:40

1. D301 の LL 機能を利用した英語 (1)・(2) の実施と課題
勝藤和子 (総合科学部人間社会学科欧米言語コース 講師)
2. 自学自習のための環境について D301 のストレージシステム
田島俊郎 (総合科学部人間社会学科国際文化コース 助教授)
3. CALL を用いた実用英語演習の試み
佐久間亮 (総合科学部人間社会学科国際文化コース 助教授)
4. ヴィデオスキットを用いたドイツ語授業の

一例

桂修治 (総合科学部人間社会学科国際文化コース 教授)

(第2部) 14:50-16:05

5. 4 MAT と CALL 授業 体験的授業構成と CALL 活動
坂田浩 (留学生センター 助教授)
6. CGI を利用した KWIC 検索プログラムの作成とその英語教育への応用可能性について
中島浩二 (総合科学部人間社会学科欧米言語コース 助教授)
7. CALL 教材利用授業の成果と今後の授業展開
少人数クラスの実現に向けて
吉田文美 (総合科学部人間社会学科国際文化コース 助教授)

(第3部) 16:20-

MLS(Management Learning System) について
小林篤 (E-DIGIC)、能勢 高明 (工学研究科所属学生)

本学では CALL 教室の他、全学共通教育棟 D 館の D301 マルチメディア LL 教室 (以下、D301) で

も CALL の授業は可能だが、この研究会の第1部と第2部は、それらを使用した授業の報告を中心とした。第1部では、勝藤氏による D301 教室を利用した授業実践とその成果、およびそれに基づいた今後の徳島大学の英語教育への提言がなされた他、田島氏により D301 の LL システムについて詳しい紹介があった。D301 に関しては、田島氏が作成管理しているサイトがあり、写真を添えた使用案内の掲載がある。後でアドレスを示すので参照していただきたい。佐久間氏は総合科学部の外国語プログラムで、少人数の学生を対象にした授業の実践について報告した。コンピューターで編集した映像や音声を授業および課外の学習に利用するという手法は、全学共通教育における英語クラスでも応用可能なものであろう。桂氏の報告は、初習外国語であるドイツ語の授業における実践についてのものである。一般に CALL システムを利用した教材には、外国語の学習がある程度進んだレベルのものが多く、初習外国語の学習でも工夫次第で効果的な利用ができる可能性を示した報告であった。第2部では、坂田氏により実際に言語を使う体験の場として授業を構成する場合の、CALL の有用性と限界についての分析が示された他、中島氏が CGI を利用して自ら作成した検索プログラムを英語教育へ応用する可能性について紹介した。本学のスタッフにより、英語教育に応用できるプログラム開発の可能性が示されたことは本当に心強い。吉田本人の報告の内容については後半で一部を引用するため、ここでは省略させていただく。第3部は本学のスタッフも参加して開発中の学習システム MLS についての紹介がなされた。これは、CALL や情報機器を利用した授業のみならず、様々な授業での学習支援に役立つものと期待されている。

当日は、学年末で様々な行事が重なったにも関わらず、その間を縫って多数の関係者においていただいた。この場を借りて、改めて御礼申し上げます。

2) CALL に関する研究会の趣旨

順序が前後することになるが、このような研究

会を開催した趣旨について申し述べておきたい。CALL (Computer-Assisted Language Learning) と聞くと、一般の反応は次の2つに分かれるように思う。

- A) 機械に教育を任せるといえるのか。けしからん!
- B) CALL を使って教育するのなら、もう人間(教員)は必要ないね。

いくらかは CALL システムを使って授業している経験者として言わせてもらえば、これはどちらにも間違いだ。CALL とは、コンピューターを補助的に使った言語学習であり、「コンピューターだけで行う言語学習」ではない。コンピューターは学習効果を上げる道具として有益な面はあるが、何でも可能にしてくれるわけではない。したがって、過剰な拒否反応もするべきではないが、過大な期待も困る。言葉をかえれば、「コンピューターなんて言語教育に持ち込むべきではない」という考え方も偏狭かもしれないが、「立派な CALL の設備さえ用意すれば、言語教育など何とかできる」と考えるのも安易に過ぎる。また、CALL を利用すると、学生の自主的な学習が中心にした授業形態になることが多いので、教員の労は少なくなると思われがちだ。しかし、実のところ CALL や LL を使う教員は見えないところで、つまり、授業以外の時間帯で、学習材料の準備に多大な時間をかける。教材研究やテストの作成・採点なども普通教室での授業と同様にやらねばならないので、今のところ CALL などの設備を使ったからといって教員が楽になるわけではない。CALL システムの活用に取り組んでいる大学をいくつか視察させてもらったが、視察先の担当者がそろって強調されたのは、CALL システムの運用に関わるスタッフ、教員および学習支援に関わる CALL 専任の教務職員の重要性であった。いくら優れた設備があっても、それを円滑に運用できる人間がいないと困ることは認識しておくべきであろう。

今後も機会があれば、CALL を利用した授業方法についての情報交換の場として、同様の研究会を

行いたいと希望している。その場において、CALLがいかにかに有益なのか、CALLを利用した授業で何が可能になるのかを冷静に見つめていければと考えている。

3) CALLは有効か?

大学、特に徳島大学における外国語教育の問題を解決する一手段として、CALLはどのように使うべきか。このことを考える際には、徳島大学の外国語教育における問題点をいくつか指摘しておく必要があるだろう。ここでは、特に英語について問題と思われる点を4点上げる。

1. 授業時間数

英語に限ったことではないが、ほとんどの学生がせいぜい週2回までの授業しか受けていない。英語の力をつけようと思えば、もっと英語に接する機会があるべきなのだが、カリキュラムの上でそれが実現されていない。

2. クラスあたりの受講者数

外国語教育においては、1クラスあたり的人数が20人を超えると教育効果が上がらなくなるといわれる。しかしながら、本学では50-60人が受講するクラスがほとんどである。

3. 習熟度の差

全学的に調査したことがないので推定でしかないが、学生間の習熟度の格差はかなりのものである。志望する学部学科によって、また前期入試が後期かによって、英語の成績が合否に影響を与える割合は大きく異なっているわけだから、入学時の学力格差はあって当然と思う。しかし、問題は格差があることよりも、どのくらいの差があるのかを全体的に把握する手段が全くないため、授業をする際にその格差に対処する方策が取りにくいことである。

4. モチベーションの格差

英語学習に対する熱意についても、学生間の差は大きいように思われる。どのような動機で学習をしているのかが問題で、いくら一生懸命勉強しても、授業で単位を取得したらおしまいでは、十分な英語運用能力を身につけることはできない。

受講中の学習も取りあえずいい成績を取るためだけの表面的なものに終わってしまう可能性が高い。

CALLを使うことによって、上のような問題の解決はできるだろうか。まず1については、千葉大学で、一部ではあるが学生が英語に接する時間を増やす工夫をしている例を紹介したい。千葉大学の学生は、1~2年次の間は全学共通教育の授業として、週に2回英語の授業を受けることになっている。そのうち1回はリーディング中心の授業、他方はそれ以外の技能を中心とした授業で、CALL使用の授業は後者に含まれている。CALLの授業では、同大学がメディア教育センターとともに制作したCALL教材が使用されているが、これは標準で30時間の学習を必要とする。1学期15回の授業だけでは、この学習時間は満たせない。よってCALLの授業を受ける学生たちは、最低15時間はCALL自習室で課外学習する。この課外学習は授業への出席と同様、単位取得のための条件となる。CALLの授業を受ける学生は週2回の授業の他に、もう1時間は英語に接することを課せられるのである。課外学習をしているかどうかは、CALL自習室を訪れた際に学習記録を記入するようになっており、CALL専任の教務職員がチェックと集計をする。自習室は授業で使われる教室とは別であり、週日は授業開始時から夕方まで学生に開放されている。課外学習は教材が用意されている自習室のみで可能なので、週当たり20クラスの授業が開講されている授業用の部屋とともに、自習室の稼働率は非常に高い。⁽¹⁾

2の受講者数の問題についてはどうだろうか。多くの学生を収容できる語学演習室が増え、学生の自学自習を中心とした学習プログラムを組めれば、1クラスあたりの受講者数を減らすことは可能かもしれない。残念ながら、今ある2つの語学演習室をフル稼働しても、全ての英語授業を少人数化することが無理なことは研究会でも述べた。また施設の数だけ増やしたとしても、学生の学力格差に応じた系統だった授業プログラムの立案がないと、施設の有効利用自体が危ぶまれる。

3の学力格差の問題については、WEB上やCD-ROMで利用できるレベル別の学習コースが用意できれば、CALLにおいて習熟度の違う学生集団に対してレベルに応じた教材を与え、学習を行わせることは可能である。全学的に学力検定をして習熟度別クラスを作らなくても、同一クラス内で各学生の習熟度レベルが把握できれば、個々の学生のレベルに合わせた学習材料の提供はできる。今回のFD研究会のために、4つのクラスでTOEICのリスニングテストを行ってみると、100点満点での採点結果だが、それぞれのクラスで最高点と最低点の間に27~37点の差があった。おおざっぱな計算だが、TOEICで250~400点くらいの差がある受講者を同じクラスに詰め込んで教えているというのが現状なのである。それに対処する方策の一つとして、CALLは有効であるかもしれない。

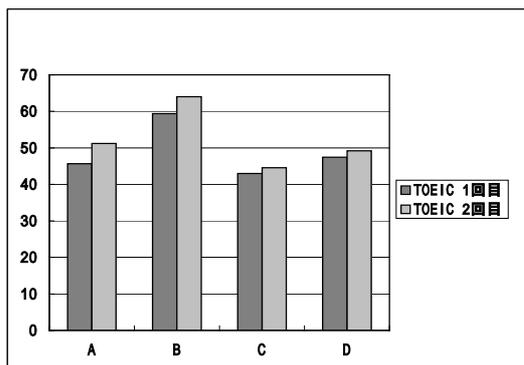
しかし、これには2つほど問題がある。1つは、教員の仕事量である。授業で受講者を習熟度別に2グループに分けた場合、受講者それぞれが学習する教材は1種類であっても、教員は2種類の教材それぞれの教材研究をし、授業計画を立て、教材それぞれに対してテストや課題を用意しなければならない。クラス内で習熟度の差が大きければ、グループ数をさらに増やした方が学習効果も期待できるが、1人の教員ができる仕事量には限界がある。2、3種類以上の教材を使う細かい対処はできないだろう。習熟度の差に細かく配慮した授業を行うためには、単にCALLを利用するだけでなく、複数の教員が同じ学習コースに関わり、仕事を分担するような方策を考える必要がある。

もう1つの問題点は、CALLでの授業が学生の自習に多くを頼った授業になるという点である。千葉大学と同じCALL教材を全学共通教育の英語クラスで利用している京都大学は、TAによる学習記録のチェックは行っているものの、学生の自主性をかなり信頼した形で授業を運営している。京都大学では、CALL教材を使用する授業は週17クラス開講されているが、受講生が教室にやってくるのは1学期に4回行われるテストのときだけで、あとは自分の都合のいい場所、時間に学習してい

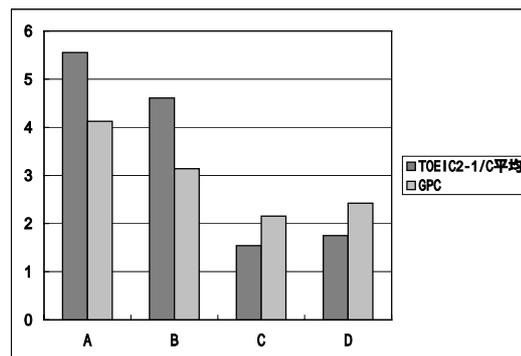
いということになっている。おおまかな調査では、京都大学の1~2年次学生が自宅にコンピューターをもっている割合は8割程度で、ほとんどの学生は自分、または家族所有のコンピューターで学習しているらしい。学内には英語学習に使える学生用コンピューターは約40台しかないものの、それで十分足りているとのことである。⁽²⁾しかし自学自習というのは、ある程度の学力があり、教師がとやかく言わなくても与えられた課題をこなせる自立した学習者でなければ、目に見える成果を上げるのは難しいであろうことも予測できる。すでに述べた通り、CALL教室の専門職員がいる千葉大学では、学生の学習記録管理は徹底していて、授業外での学習支援態勢も充実しているが、同じような恵まれた環境は徳島大学にはない。

さらに付け加えると、CALLによって学生の習熟度に応じた細やかな対応を目指しても、学生の学習動機が「とにかく単位を取りたい」程度のものでしかなかったら、教材を選ぶためのプレースメントテストでその学生の習熟度レベルをはかることさえ難しい。自分のレベルに合ったもので学力を伸ばすことよりも、自分のレベルより下の教材を学習することで、とりあえずいい成績を取るといった目の前の目的を優先する者もいるだろう。自学自習が可能なだけ自立しておらず、モチベーションの低い学習者については、CALLを利用するだけでは不十分であるかもしれない。

それを裏付けることになるかどうか分からないが、2003年度に私が担当した授業でCALLを使用したクラスと使用しなかったクラスの学習成果を比較した結果を示す。比較の手段としては、担当したクラスがListeningの向上を目指したものであったので、TOEICテストのリスニング模試(問題数100題)を利用した。通常のTOEICとは異なり、問題1題に対して1点を配点するという単純な方式で採点した。研究会で報告済みなので、細かい説明は省くが、授業の初回と最終回でテストを実施した。その際の各クラスの平均点をグラフ1、1回目の平均点と2回目の平均点の差、およびGPCをグラフ2に示す。



グラフ1

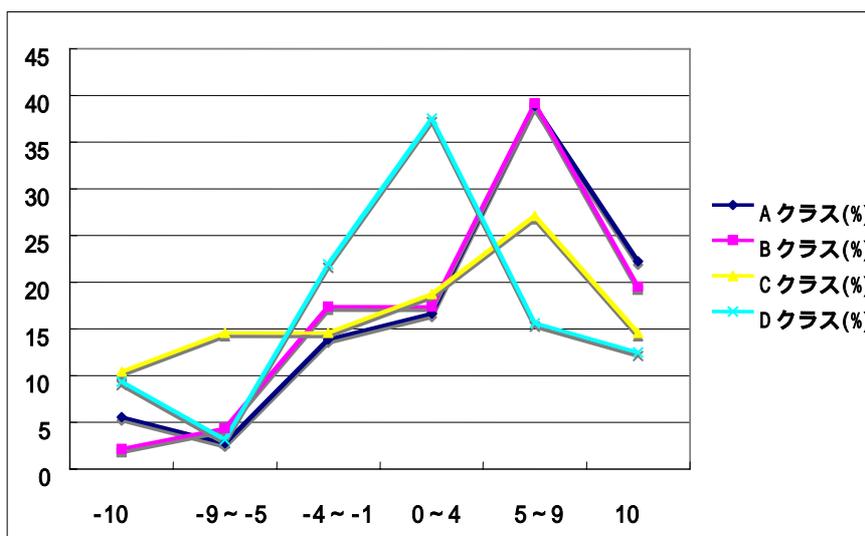


グラフ2

A、BがCALLを使用したクラス、C、Dが普通教室でビデオ教材を使用して授業をしたクラスである。Aクラスは平均でTOEICリスニング素点が5.5伸びている。単純計算では、実際のTOEICリスニングテストで25-30点くらい伸びると期待できる数値である。Bクラスも4.6上昇している。一方、Cクラスは1.54、Dクラスは1.75と2ポイント未満の伸びに留まっている。これだけを見ると、CALLには確かに効果があると思いたくなる。また、TOEIC得点の伸びは各クラスのGPCと対応しており、CALL使用クラスでは受講者が与えられた学習を地道にこなしていることがうかがえ、結構なことだと結論づけたい。しかしながら簡単な統計分析にかけてみると、いささか違った結果が出てくる。2つのCALL使用のクラスについても、2回のテストの間に有意差が認められず、

CALLを利用したことが学生の学力をのばしているかどうかは、はっきりしたことがいえないという結果が出てしまうのである。

クラス全体の平均点が普通教室使用のクラスより相当伸びているにも関わらず、統計分析をすると有意差が認められないという結果になってしまう理由は、以下のグラフ3から分かるように思う。これは、TOEIC得点の推移を各クラスの人数分布で示したものである。各クラスとも、2回目のテストで10点以上得点が下降したグループ、5点から9点下降したグループ、1点から4点下降したグループ、得点と同じか4点まで上昇したグループ、5点から9点上昇したグループ、10点以上上昇したグループの6つに分けて、クラスの総数に対するパーセンテージを取ってみた。グラフ1、2と同じくAとBがCALL使用クラスである。



グラフ3

これによると、Aクラス、および学期のはじめでTOEICの平均点がAクラスよりも10点以上高

かったBクラスは同じような分布で、この2クラスではリスニング力が5点以上伸びた学生が6割

前後いた。CクラスやDクラスと比較すると、リスニングの実力が伸びた学生の割合が多いが、これはAクラスとBクラスでは、CALLシステムの使用により、個々のペースに合った学習が可能であっただけでなく、最初のTOEICテストの成績で受講者を2つのグループに分け、それぞれの学力に応じた教材を与えるという配慮をしたためであろう。しかしながらCALLの授業でも、2回目のTOEICの成績がさほど上がらなかった者や逆に下がってしまった者が、普通教室使用のクラスに比べると大幅に少ないとはいえ、4割近くいる。個別に見ると、大きく得点をのばしている者も多くいる一方で、さほど学習成果が上がらなかったり、学力が大幅に落ち込んだりした者もかなりいるのである。このため、クラス全体で平均点が上がっているにも関わらず、統計分析では有意差がないという結論が出てしまうと思われる。

このような結果をどのように評価すべきか、データの数自体がまだ少なく、また私自身がこの種のデータをとることに不馴れなので、確かなことは言いづらい。しかし、自立した学習者ではない者、学力が十分でない学生や英語の学習に対して動機づけがしっかりしていない学生については、CALLでの学習は必ずしもプラスにならなかったという推測はできる。CALLを使用したのにTOEICの得点がさほど上がらない、または大幅に下がったという学生について個別に見てみると、おおまかに3つの傾向が認められるように思う。差し障りのない範囲で、それぞれについて具体的な例を上げてみたい。

A) 基本的な学力がないと、短期間では辛いというケース

実例：学生a (TOEIC 正答率 1回目：39%、2回目：38%)

Aクラスの所属。グラフ1からもわかるように、よくできるBクラスを除いても、1回目のTOEIC平均得点は40%を超えるので、リスニングについては本学1年次生の平均レベルより習熟度は劣る学生である。この学生は英語についてはかなり苦手意識があり、単位の修得ができるかどうかにも

不安を持っている様子であった。そのような危機感のためか、まじめに努力をしようという気持ちはあったようで、与えられた課題に地道に取り組み、GPAも4.64であった。しかし、もともと十分な学力がないためか、期待したほどにはTOEICの得点が上がらなかった。リスニングの実力テストで成績が上がらない大きな要因は、もちろんリスニングの訓練が足りない、つまり音声聞いて内容を理解する訓練に十分な時間をかけていないことである。そのような場合でも、基礎的な文法理解や十分な語彙があれば、短期間の訓練で飛躍的に成績が上がる場合もある。しかし、リスニングだけでなく、他の技能においても訓練が十分でない場合は、それだけでは足りない。あくまでも受講態度を見た上での推定でしかないが、この学生についてはリスニングだけではなく、総合的な学力向上を図るような授業内容がふさわしかったのかもしれない。

B) 努力しないと当然のことながら学力は上がらないというケース。

実例：学生b (TOEIC 正答率 1回目：36%、2回目：23%)

TOEIC正答率から見る限り、学生aと同じく平均よりも習熟度レベルが低い方である。この学生は、学生aよりも大幅に得点が下がっているが、その原因の一つは、授業の受講態度であったと推定される。この学生のGPAは2.3であったが、所属していたAクラスのGPCが4を越えていたことを考えると、かなり成績が悪い。CALLを使用したクラスについては、CD-ROM教材を使った学習形式が新鮮だったのか、他のクラスに比べると欠席率も少なく、こちらが目論んだよりもGPCは高くなってしまったのだが、GPAは3.0あれば平均レベルという見方からしても、この学生は決していい成績ではない。特に学期中に数回行った小テストへの取り組みが十分でなく、平均して40%の得点しかあげていない。大きなテストのための勉強には身が入るのか、2回のリスニングテストではもう少しましな成績を得ているが、それにしてもクラス平均を下回る。英語習得のため地道な

努力をしていたとは見なせない。ここでは、Aクラスに所属していた学生の中から大幅に得点を下げた例のみを取り上げたが、同じような学生は少なくない。総じて GPA が 3.0 に満たない、遅刻や欠席が多いなどの傾向が認められた。

C) TOEIC で自分の学力を計ることに興味があなかったのかもしれないというケース

実例：学生 c (TOEIC 正答率 1 回目：40%、2 回目：30%)

先にあげた調査で授業成果を見るために TOEIC の模試を使った理由は、「学生が TOEIC の受験に対して、程度の差はあるものの関心は持っている」との前提からであった。しかし、その前提は間違っていたのかもしれないと思われた例である。この学生については、上で取り上げた学生 b やそれに類する学生たちのように、10%も TOEIC の得点が下がる要因は見当たらない。この学生は、Aクラスの所属で GPA は 3.52。クラスの平均よりは低いものの、まずまずの成績と見てもいい。小テストの成績は 90%を越えているので、日頃の努力も怠っていたようには見えない。この成績でこれほど得点を下げている学生は他にはなかった。実に不可解な例である。ただし、同じくらいの学力であった学生 a と比べると、受講態度にはやや甘さが見られたことも確かである。GPA が劣るだけでなく、欠席や遅刻はやや多い。小テストの実施は毎回ではなく、実施日は予告されていたが、実施日の合間をぬって欠席しているように見受けられた。しかし逆に言うと、適当になまけているにも関わらず、それなりの成績を上げる力があるのではないかとも思われた。

このような学生が、それなりに勉強もしながら 10%も得点を下げるとしたら、その理由は「2 回目の TOEIC の日は、たまたま体調が悪かった」または「2 回目の TOEIC は手を抜いた」ということくらいしか考えられない。TOEIC テストは、リスニングのみでも 1 時間程度を要し、途中で休みもなく実施される。体調が悪く集中できない時などは、十分に実力が発揮されない場合もあり、そのため得点が下がったという可能性は否定できない。し

かし手を抜いて適当に受験したのなら、こちらが思うほど、学生の方は TOEIC に関心を持っていなかったと言える。ほとんどの学生が 1 年次であることから、実施前に TOEIC 受験の意義については十分な説明をしたつもりだったが、まだ 1 年次の段階では理解しきれなかった向きもあるのかもしれない。

「学生が受験時に手を抜いたかもしれない」という懸念を払拭するためには、TOEIC の得点または得点の上昇・下降率を授業成績に反映するという手段もとるべきだった。しかし、TOEIC 受験対策を中心にすえた授業ならともかく、全般的なリスニング能力を上げる目的の授業で、そのような手段をとることに妥当性があるかどうかは、迷うところである。今後、授業成果を見る時には、使用する教材とテストの種類について、さらに細かい配慮をしてみたいと思う。しかし、「～しないと成績が悪くなる、単位をやらない」という脅しをかけないと十分な学習してくれない、テストをまじめに受けてくれないというのを、放っておくのはいいことだとは思えない。英語を学ぶ意義を学生に徹底する必要性もあると考える。

CALL を使用し、学生が自主的に学習するような環境を授業、および授業外で提供することには、大きな意味があると思う。ただし、その一方で自主的な学習をするに必要なだけの基礎学力や学習動機を育てていく具体的な方策も必要であろう。CALL を生かすには、CALL 専用の教材開発や授業方法の改善だけでなく、CALL を使った授業が外国語授業全体の中で有効に機能するよう、考えていくことも欠かせないと思う。そのためにも、実際に CALL で授業を行う教員だけでなく、言語教育に関わるか、または関心を持つ教員とも情報交換ができる形で CALL に関する研究を進めていきたい。

付記

本文中にも紹介したものも含めて、学内の外国語教育関係のサイトを紹介する (2005 年 1 月現在)。

1. *Welcome to the Language Laboratory* (『LL 教室へようこそ』)

<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/ob/ll/portal.html>

D301 の使用法についてのサイト。全学共通教育センターのページからもリンクがある。

2. 高度情報化基盤センター (AIT Portal Site) 内の英語学習サービス (学内限定であるが、無料で利用可)

<http://www.ait.tokushima-u.ac.jp/ait/>

上記のサイトの『主なサービス』の『英語学習』からアクセスできる。TOEIC 受験対策用の自習プログラム等が用意されている。

註

- (1) 2001年度にCALL授業を実施している大学から講師を招聘して講演会を行ったが、英語教育では千葉大学外国語センターの高橋秀夫助教授が、CALL教材シリーズ *Listen to Me!* による授業実践およびその成果を披露してくださった。なお、私が担当したCALL使用クラスで利用したのも、*Listen to Me!*のうち、以下の教材である。

Listen to Me!: First Listening (初級用 CD-ROM 教材)

Listen to Me!: Introduction to College Life (初中級用 CD-ROM 教材)

Listen to Me!: College Life (中級用 CD-ROM 教材)

以上の教材は、文部科学省科学研究費補助金による特定領域研究「高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究」(領域代表者: 坂元昂) 中の計画研究「外国語CALL教材の高度化の研究」(研究代表者: 竹蓋幸生) によって制作されたものである。

- (2) 2002年度、京都大学にてCALL教材による授業実践の成果についての聞き取り調査から。